ひばりのおじさん

小川未明

町の中で、かごからひばりを出して、みんなに見せながら、あめを売る男がありました。その男を見ると、あそんでいる子供たちは、「ひばりのおじさんだ。」と、いって、そばへよってきました。

あき地になっている、すこしのひろばへ、かたから、あめの箱と、下げているかごを下ろしました。

「さあ、お坊ちゃんも、おじょうちゃんも、あめを買ってください。ひばりをはなして見せますよ。」と、男は、こしをおろしながら、子供たちの顔をながめました。だいぶあめが売れると、男は、かごのふたをあけて、

「さあ、とべよ。」と、いわぬばかりに、片手を上げて、後さがりをしました。

ひばりは、やがて、ピイチク、ピイチク、なきながら、高く、高く、空へ上がりました。そして、このまま、どこへかとんでいってしまいそうに、見えなくなったが、そのうちおじさんが、ピイ、ピイ、笛を鳴らすと、けんとうを、あやまらずに、えんとつや、たてものの間を分けて、すぐ近くへ下りて、またかごの中へ入ってしまいました。

おじさんは笑いながら、「私のいのちより、大事にしていますよ。」と、いつもいうのでした。

ある日、おじさんは、いつもの場所へきて、年ちゃんや、義ちゃんや、とめ子さんのいる前で、ひばりをかごからはなしたのでした。

ピイチク、ピイチク、となきながら、いつものように、ひばりは、空へ高く、高く、上がっていきました。

このとき、人間の耳には入らなかったけれど、はるかかなたの空で、ピイチク、ピイチクとなき声がしたのであります。

「はてな、どこかしらん。」と、ひばりは、思いました。それで、いっそう声をはり上げたけれど、むこうの声は、すこしも近よるようすがなかったのです。

「いってみよう。」と、ひばりは、その声のする方へ、とんでいきました。青い、青い、野原の上で、二羽のひばりが、たのしそうに、とんでいるのです。

「やっぱり、野原はいいですね。」と、かごのひばりが、いいました。

「町も、にぎやかで、いいでしょうね。」

「私が、よんだとき、なぜこなかったのですか。」

「かわいい子供が、あの黄色くなりかけた麦のはたけにいますので、私たちは、心配で、どこへもいくことができないのですよ。」と、野のひばり

が、こたえました。
　日がくれかかると、野のひばりは、麦ばたけの巣の中へ帰りました。そこには、かわいい子ひばりが、お母さんや、お父さんの帰るのを待っていました。ひとり取りのこされたかごのひばりは、
「ああ、やはり私は、かごの中へかえろう。」と、町の方へとんできました。おじさんは、ひばりがいなくなったので、気を、もんでいました。
　そのとき、ピイチク、ピイチク、ひばりの声がしました。おじさんは、よろこんで、ピイ、ピイ、笛をふきました。ひばりは、だんだん地上へちかづくと、じっと自分を見上げているおじさんの顔と、年ちゃんや、義ちゃん、とめ子さんたちのかわいらしい顔を見たのであります。

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「せうがく三年生」
　　1938（昭和13）年6月号
初出：「せうがく三年生」
　　1938（昭和13）年6月号
※初出時の表題は「雲雀の小父さん」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年10月25日作成
青空文庫作成ファイル